自然を語る会
2021 年 1 月 16 日(土)　10：00～12：00
ZoomMeeting
参加者　16 名
担当者　鈴木善次さん

斎藤幸平著『人新世の「資本論」』（集英社新書、2020.9 発行）を読み、
レイチェル・カーソンの提言「べつの道」を考える

今月の自然を語る会のテーマは今話題の本『人新世の資本論』（斎藤幸平著）。顧問の鈴木善次さんの概説資料と説明をベースにカーソンの提言「べつの道」について参加者の皆様とディスカッションを行った。

「人新世」とは、人類の経済活動が地球に与えた影響があまりにも大きいことから、ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルッツエンによって名づけられた地質学上の年代のことで今から 1 万 2 千年ほど前から現在までと定義されているとのこと。

「資本論」は、カール・マルクスが発表した著作ですが、近年、新 MEGA（マルクスとエンゲルスの出版物、遺稿、草稿、書籍の全集）の新たな試みが国際的な共同作業で行われており（著者の斎藤さんも作業メンバー）、晩年のマルクスの「研究ノート」から新たなマルクスの思想の発見や解釈の整理が行われており、本書はその共同作業で発見した新たなマルクスの思想に基づいて纏められている。

晩年のマルクスは世界の”共同体”や”エコロジー”の研究を行い、社会の繁栄にとって不可欠なのは「自然の生命力」であり、資本主義はその自然の生命力を破壊するものと考えていた。そして、無限の経済成長ではなく大地=地球を<コモン>として管理することで平等で持続可能な脱成長型経済を目指すことが大切だと考えていた。

本書では、私たちが「人新世」の環境危機を生き抜くためには晩期マルクスの思索からこそ学ぶべきと説く。すなわち、人類は気候変動など地球的規模での環境危機に直面している。その要因は「無限の経済成長」を目指す資本主義であり、解決する鍵は「脱成長コミュニズム」。そしてこれからは、①使用価値経済への転換、②労働時間の短縮、③画一的な分業の廃止、④生産過程の民主化、⑤エッセンシャル・ワークの重視。という 5 つがこの本で提案されていた。

経済システムの変換という大きなテーマだったたけに、参加者の皆様からは、日頃から何となく感じていたことを具体的に言葉にしてくれた。これまで取り組んで来た活動やカーソンの「別の道」に繋がる。という好意的な意見がある一方で、価値観の見直しも必要。具体的な取り組みを考えていく必要がある。など慎重な意見もあり、継続して考えていかなければならない大きなテーマであると思いました。

様々な意見がある中で「人任せではいけない。市民の一人一人が当事者として立ち上がり、声を上げ、行動しなければならない」「3.5%の人々が非暴力的な方法で本気で立ち上がれば社会を大きく変えることができる」というメッセージには勇気が湧いてきました。

（文責　柳澤）